

麻疹騒動の思い出

前教育学部長 秋 山 元 秀

滋賀大学保健管理センターとのかかわりで強い印象が残っているのは、平成 19 年 5 月から始まった「麻疹騒動」である。「騒動」というといかにもセンセーショナルないかたであるが、しかし実態としてまさに大学を揺るがす一大騒動であった。ちょうどそのとき私は教育学部長の任にあり、責任を負うべき当事者の一人であったため、その当時の危機感はとりわけ鮮明に覚えている。

その第一報は、くしくも教育学部の安全衛生委員会の席で、産業医の吉川医師から直接聞くことになった。その朝、教育学部の学生が吉川医師のところで受診し、まちがいに麻疹であるとのことであった。すでに関東では 4 月ころから広範に流行しており、一時休講、さらには閉校にする大学が相次いでおり、5 月には都内の 15 万人の大学生が影響を受けているといわれていた。その流行は東海や中部にもではじめており、やがて関西にも及ぶことは時間の問題と思われていた。

しかしこんなに早く足元に火が着くとは思っていなかった。早速その学生の最近の行動範囲を確かめたり、受講している講義の受講生のリストを調べたりすることをはじめたが、不幸中の幸いというか、その学生が大学院生であったので、授業等での接触範囲はそれほど広くはなかった。とにかく本学での感染を防ぎ、社会的な影響の拡大を極力避けるために、可能な措置を速やかにとることにした。とくに教育学部では、附属校園での教育実習をひかえており、もしも実習生から附属校園に感染が広がったなどということになれば、大きな問題になることが懸念された。

その後の経緯については、よく知られていることであるが、本学では、何人かの感染者はあったものの、大学閉鎖や一斉休業をすることなく、また附属校園においてもとくに感染が広がることもなく、教育実習について若干の予定を変更しただけで、大過なく終息を迎えたのはまことに幸いであった。早期に実施した大学負担の学生の抗体検査や、ワクチン接種への誘導等は、マスコミからも注目され、テレビの取材を受けたりもした。今から思えば、ずいぶん危ない橋を渡ったような点もあったが、とにかく何とか難局を乗り切ったのは、保健管理センターのスタッフの献身的な努力というまでもなく、附属校園も含め学部と本部が一体となって、大学全体で問題に対処する体制がうまくできたからであろうと思っている。

今年は幸いにもこのような「騒動」は起きていないし、入学者に対する指導なども、去年の経験にもとづいて必要な措置が行なわれているようである。しかしいくら衛生条件が改善され、医療技術が発達しても、グローバル化が進んでいる現代社会において、新型インフルエンザや新しいタイプの感染症が一気に広まる可能性はむしろ高まっているといわれる。戦争や災害のように派手ではないが、ウィルスや細菌による人類への攻撃は、社会のもっとも基盤である健康へのリスクとしては、もっとも危険なものかもしれない。今年もすでに秋の季節に入っているが、大きな「騒動」が起こることなく年末を迎えられることを祈っている。